

フフホト（呼和浩特）・張家口・北京8日間の旅

2018年8月23日（木）〜30日（木）

鶴留エマ（会員）



【初日】8月23日（木）北京着16時55分・フフホト着21時30分

羽田から北京空港へ、広過ぎるこの空港で団体からはぐれたら大変なことに。国際善隣協会主催の、この旅行14名の参加者。矢野会長と同期生の私が最年長か。空港で添乗員の侯（コウ）さんと合流。30日までの8日間全行程を同行する侯さん。

20時発フフホト（呼和浩特）行までの時間を空港内で早い夕食、「ラーメン」。何で北京でラーメンを食べるはめにとはいつも、皆さん纏まって行動しているので。夜8時（現地時間は日本より1時間遅れ）でも薄明るい機上へ、9時半にフフホト（呼和浩特）着。バスで市内へ。大通りの両側は夜目にも新しく高層ビルが並んで、林立するビルの壁面の全てを、

ネオンが。色とりどりの流動的な様々の渦や滝の落下様のデザインが変化し、広告ではない電飾に「何！コレ」と思う。

夜半12時近く、人通りもほとんどないのに空港からのネオンのデモンストレーションに圧倒された。

何たる電力の無駄使いと数十年前の電力不足の中国。張家口で夜になって知人宅を訪問すると、各部屋にアセチレンランプの灯火が置いてあった昔を思い出した。バスの中で侯さんが、現在の内モンゴルが資源豊かな地でもあると話していたが、天然資源埋蔵量、種類の多い土地柄が経済力を支えているのかも知れない。中国のドル箱か。

フフホト（呼和浩特）ホリディイン（假日酒店）は2度目。前回から6年程か。外装、内部も見違える程立派にリニューアル

アルされて、豪華になっていた。

【2日目】8月24日（金）フフホト（呼和浩特）好天

5時前に目覚め7時前に朝食に。皆さんの顔が揃っていて、バイキング中・洋式。9時出発、市内、大召（回教寺院）へ。寺の周囲は本堂や学房の前庭が小さな広場と化して地面に布を敷いて、小山盛りの葡萄や小さいリンゴを並べた果物売り。玩具や、ピンコル（葡萄と杏等をパリパリの砂糖飴で衣とし、竹串に刺した菓子）を売っている。参道は広がって繁華街に変わり、両側に2階建店舗、その前には土産物や貴石の数珠や腕輪、指輪、ネックレス等の露店が並ぶ。かつては、若い学僧や、寺で一生を過ごしている老僧もチラホラ行き交う静かな

境内であったが、今は家族連れや若者達がぞろぞろ。内モンゴルってこんなに人口が多い所なのか。

かつては物静かな古都で新城と旧城を一筋の並木路が繋いでいた。旧城地域の大通りに面して軒先に赤提灯をずらりと吊るした大店の料亭、脇門を入ると中庭の植込みの間に点在する離れ客室、風情豊かな老舗で夕食を済ませた覚えが残っている。

今もあるのか店名も覚えていないが、北京にもあまりない中国の伝統を残している、フフホト（呼和浩特）の料亭に6年前行った。

昼食は野菜の小皿料理が次々とどれも美味しく現在の中国料理はこんなに進歩しているのかと驚いた。

王昭君の墓所は広大な公園に変わっていた。

大理石様の白

い石畳が一直線に、中間に、門や記念碑を造り長い参道が延び、盛土の小山（40米位の高さに石段を回し登れる）の前に



フフホト王昭君記念公園参道

墓碑が置かれ横に石造りの小亭がある、立派な墓碑である。途中には白亜の建物が入在し、博物館もその一つ。

王昭君は前漢、紀元前33年頃に中国宮廷からモンゴルに遣わされた女官、王妃となり、蒙・中の懸橋に務めたと碑文にあった。

5時から呼和浩特（フフホト）科学技術庁を表敬訪問、関連の事業を同庁主席副官と、国際善隣協会矢野会長が調印署名式を挙行。続いて式典出席者全員で、夕食会を同庁ビル内で盛大に和気あいあいのうちに開催。同庁のトップの3人は日本語がとて上手で、日本側も数人は中国語が堪能、通訳も混えてお喋りも盛りあがった。

【3日目】8月25日（土）フフホト（呼和浩特）から百霊廟 曇々立

バスで北東170キロ、モンゴル高原の街百霊廟へ。地名にもなった古くからの廟。要衝の地。

昭和12年（1937年）第2回蒙古会議がここで開催、「蒙古聯盟自治政府」が発足。

内モンゴル王侯が集まり統一化が実現。首都を厚和（呼和浩特）に置く。しかし国際的には独立国と認められなかった。

主席「雲王」、高齢で間もなく他界、副主席「徳王」が主席に。日本軍は昭和7年頃から「徳王」と親交を深め、後ろ盾でもあった。

百霊廟は昔ながらの本堂、石畳の中庭を本堂から前門を繋ぐ建物で、四角く囲み、手入れも良い。

堂守には貫禄のある僧が室内に居て、灯明や太い線香が絶えない。須彌壇も立派。

お堂の中の私達は、折から急な激しい夕立に見舞われ、計らずも仏様に雨宿りをお願いする。

数十分で小雨に変わり、私達一行の他にも参拝人数組が室内に留まっていたが、小降りになると、お詣りに入堂する人達が入れ替わり続く。

今も信仰を集めている百霊廟。この地には、日本軍が度々、特務機関を置いたが、近くのシラムレン廟で、昭和11年12月に、29名の機関員が襲われて全滅する事件があり、制圧できない場所であった。この地一帯では、名将、「傳作義」が率いる部隊の守りは固かった。

25日は秋元さんが独りで五原までタクシーを駆って五原作戦で亡くされた身内の方の回向に出掛け、早朝にフフホト（呼和浩特）を出て夜も晩く帰ってきた。

長年の願いを今回果たすことができた。私は持参の線香を分け持って行ってもらった。五原作戦は多大の戦死者を出して、日本側は警察隊と特務機関に大きな損害を招いた。それらの出撃、戦闘は黄河が凍結している、厳冬の12月から3月までも行われ彼我の将兵の労苦は、如何ばかりであつたろう。

【4日目】8月26日（日）ウランチャブ・上都・多倫 晴れ

昨25日夕方、ウランチャブ着、長いバス旅のトイレ事情は様々で、何とか及第から、青空を仰ぎ物陰で、或いは物陰ナシの遠方、トイレはあつても青空を選ぶ。先客の遺物に注意を怠らずに。

ウランチャブは草原の都市として新しく。ホテルもこの旅行で一番立派であつた。以前はホテルに着くと、バスから降ろしたスーツケースやトランクは、ホテルのボーイが荷台に積み、各部屋まで運んでくれたが、今回は必ず、自分の荷物は自身で運ぶことに。老いて非力になった私にはこたえた。次回から持ち物を極力減らす心掛けをと思いつつ、はたして「次回有りか」と思わず苦笑した。バスは全旅程が同一人のドライバー。道路は時に迂回路に入り小休止をする。

運転手には長時間運転中には休憩時間を取る規制がある。運転席横の乗降階段の真上に、黒色のプラスチックの輪に、径10センチ程のカメラが2個取付けてある。人々の乗降が撮影できて、センターに送られる装置。

バスが直線道路で徐行し始めて、道端に寄り停車。休息時を忘れて走行していると「止めて休め」の警報がなる。

GPS（全地球無線測位システム）が見張っているようだ。

中国は管理社会。

上都は元

のフビライも使った王朝の夏の宮廷、酷暑の北京から逃れての避暑地、現在は広大な宮廷を囲った土塁を包んだ煉瓦の城壁の間を専用のトレイラーが観光客を乗せて数十分かかって移動。近くの高台への階段を昇ると、折からの夕陽に照らされて、上都の城内跡が見渡せる。ほぼ長方形の平地、遙か彼方に城壁が崩れても見える、夕陽に照らされて。吹



上都博物館前

き抜ける風で少し肌寒くなってきた。誰も無言で。

【5日目】8月27日（月）多倫・張北・張家口 晴れ・小雨

多倫は宿泊のみ。街の朝、店々は開いてはいないが、「瑪瑙・琥珀」と書かれた看板を車窓から多く見た。貴石の産地なのか。

通称、東寺。西寺の著名な二寺も素通り。今は往時の建物は西寺の鐘楼のみ現存しているが、数百年前に日本から修行僧を派遣し、経文版木の製作を手伝った大寺である。幸い版木は経蔵に保存されている。参詣できなくて少し残念。

張北で昼食、高層マンションが林立する街に変わった張北。黒城と別名のある黒っぽい灰色煉瓦城壁で囲まれたその城壁は全くなくなり、新築なが



張北の新築の楼門、黒城城壁はほとんどなくなったようだ。

ら昔の鐘楼を模した門が郊外にポツンと建てられてあった。記念撮影はその門前。丸一陣地跡、跡地を見渡せる「烈士之塔」への立ち入りは許可が出ず、後方の山へ登ったが方向が判断できずに、折からの小雨で向かいの丘陵がモヤに包まれ、塹壕跡も確認ならず。

昭和20年（1945年）8月9日にソ連が参戦。二連（アルレン）（内・外モンゴル国境付近）南東下にソ連は到達。駐蒙日本軍は響兵団のみを残して、主要兵団を不利な戦況の南方フイリピンへ移動させた。響兵団は元来、占領地の警備を主とする二流部隊で対空・対機甲・対ガス等の訓練も普及されていなかったと、当時の参謀、「辻田新太郎」が書いている。

9日に駐蒙軍は、討伐等で張家口を離れていた軍隊全てに、帰張命令を出し丸一陣地へ集めた。

14日にソ連軍は張北へ到達。15日に残留の増田中隊が張北城外へ出て、3日間でソ連軍を迎え撃ち撤退させ、増田中隊は徹底的抗戦するといっていたが、玉音放送直前に帰隊。軍命令が「本15日以降、戦闘行動停止せしめられる」と伝達。一瞬、張り詰めた心が……」が次の瞬間、現実に戻り、今、ひしひしと迫り来る、一個師団の敵に辻田は思いを馳せるので

あった。

「悲憤慷慨も虚脱感も湧いてこない。緊張の連続だ。これから先が難しいのだ。丸一陣地に戻らなければ」と辻田は回想している。

15日から3日間、ソ連軍は丸一まで押し寄せなかった。増田中隊の強気の抗戦の背後には、日本軍の大軍が控えていると読み、増強軍を待っていたのか。蒙疆地区から張家口へ集結していた邦人達に、この3日間が貴重な引揚態勢の時間となった。蒙疆政府・日本軍・華北鉄道が日本の置かれている戦況を予測し、昭和20年に入ってから、張家口駅に貸・客車を留め置き、5百両が溜まっていたという。この引揚準備が満州地区程の悲惨な状況に至らずに、北京・天津へと邦人を運んだ。混乱のうちにあっても。

8月19日に邦人総勢に引揚命令を出し、22日までに概ねの引揚を終了した。

丸一陣地に派遣された、駐蒙軍響兵団はソ連軍と白兵戦も行い、80名の戦死者・犠牲を出しつつも、夜半の雨に紛れて22日夜撤退が成功し、邦人引揚のため、ソ連軍の足止めに殿軍の役目を果たし、27日南口へ無事に帰還、駐蒙軍作戦部長、総参謀等将官達の出迎えを受ける。

張家口の通貨、蒙銀券は蒙疆銀行発券、

金本位制で敗戦後もしばらく北京で通用したとのこと。蒙銀券1圓は、日本銀行券と同一のレート、北京通貨の20倍の20圓で通用した。

夕方、張家口に到着。秋元さんが昭和12年8月27日に、日本軍が張家口へ入城したと話した。何かの縁であるのか。

張家口のホテルに着くと、荷物を解かずに近くの胡同へ、ルームメートの所崎さんと歩き出す。露天で塩味の南京豆1斤（5百グラム）30元。木耳（きくらげ）1斤50元、高い！ボラれている気がするが、まあ、いいか。小雨が降り出しホテルに帰る。

【6日目】8月28日（火）張家口市内観光 上天気

朝食後7時半に曹夫人とロビーでお会いする。娘の曹宇蘭ちゃんは日本人と結婚して、つくば市に住み、私の娘分でもある。6年振りの再会。手を取り合っているうちに涙が出て、抱き合ってしまう、また涙。私の張家口の身内、曹夫人はこの6年で息子・夫が他界、そのことが私達の涙の遠因。

張家口のお菓子と宣化の葡萄と南京豆を、私に買っておいとくださいと、娘の宇蘭ちゃんを通してお願いしてあったの

で、両手に重い品々を持参され土産にくださった。夫人は中国語で、私はほとんど聞き取れない。通訳できる楊さんも白さんも都合がつかなくて残念。9時には出発で、1時間喋り続ける。私は桜文様の茶碗・御飯茶碗各1個と、チョコレート2箱・ココアパウダー2袋と牛乳パウダー1袋、フェイラーのタオルハンカチ1枚をお土産に。

張家口市内の北の方
向、清河に
沿った道を
大境門へ。
突当りを左
に曲がると
大境門外の
広場に出た。
バスを降り
る。辺りは
公園になり、
石畳が敷かれて周囲にあった民家は、全
て取り払われて万里の長城と、その市内
に入る入口の大境門以外は建物がなくなっ
ている。



張家口大境門外

門を潜ると市内。明德北街の大通りが
街へと導き、両側の古くからの民家が様々
の形で建ち並んでいたが、今はこれ等も

立ち退かさ
れて、鉄柵
の通行禁止
の向こうに
新しく、昔
風に模した、
2階建ての
店舗が、灰
色煉瓦に赤
い窓枠や欄
干を取り付
け、未入店
の空き店舗街となつて続いていた。何だ
これは。大境門上には料金を払って登れ
る。つまり万里の長城に登る。門内の市
街の方を見ると右手の山上へ長城は続く。
その下方には狼煙台や寺院があった。



大境門上

現在も流石にそこだけそのままに残っ
ていた。鉄柵の横の破れ穴は人が通るら
しく、草が踏まれていて、私達は潜って
空店舗街を横切り、寺院への階段が見つ
かった。お詣りして、寺務所に居る僧が、
線香を私達に売るつもりで束にして出て
来たので、20元のお賽銭を渡し買い求め
て手向けた。

寺の案内板に、元代からの由緒が書か
れ建造の一部に元代の部分が残存と書い
てある。

拝殿の前柱の上部に精緻な彫刻文様がある
ので、これかしらと思いつつ見入った。
よく手入れされた寺院であった。寺
の名を書き留めずに失敗した。



張家口、画面中心の石柱は元代作か。大境門手前（門を背に右手）残存、元由来の寺院。

帰途、徳王が蒙古聯合自治政府の主席
として政務を執っていた、四合院を探す。
前に行っているが案内してもらっていた
ので、見当がついていると思うのに。手
懸りは共産党学校という、バスを停め
てくれたが、明德北街ではない別の学校
で石井妙子さんも違うと首を振る。

私も少し記憶が戻って来て、確か大境
門から南へ戻って、広い大通りと交差す
る手前にはあるはずと、地図を確かめバス
を戻してもらった。目的地の辺りで見つけ
る前庭を持つ赤い廟のような建物の門が
あるはずであったが、その赤門の前に新
しい門ができていて見え、印象が変わっ

ていた。門を二つ潜ると四合院が塗り変えられて、落ち着いた濃茶色に重厚な仕上がりで建物が見えた。

張家口で一番立派な造りの四合院と私は思っているが、荒れて畑になっていた中庭も手入れがなされて嬉しいこと。

察南自治政府跡地として史跡指定を受けたと小広場新門に大きく看板が掛けられて、予想外の昇格か。徳王の存在がフフホト（呼和浩特）は勿論、張家口でも徳王の存在を認める事由が今までは見られない、皆無にさえ私には感じられていたから。少しは見直しがなされる時が来たのか、歴史の流れを思うと日本人の私には意義深い。

徳王は威風堂々と体格も良く、英語・日本語もかなり解して知識人であったと聞く。蒙疆政府（蒙古聯合自治政府の略称）高官や日本軍要人に対しても、思うところを率直に言い、要求も堂々と伝える大人であったと、蒙疆政府総務の中島萬蔵が語っている。

1943年に政府の内蒙調査隊が派遣され、私の父も蒙疆文芸懇話会から参加した。西ソニット、徳王の本拠地に挨拶・補給を兼ね立ち寄り、草原に白馬を駆っている徳王を見掛け、真紅の上衣姿に、一行は絵になる光景と思って小雨の

中で見入った。

蒙古の国造りと民族独立に力を尽くした徳王、日本軍との癒着で、蒙古聯合自治政府主席に納まったと評価が低かったが、見直されて良い人物である。

夕食はホテルで、今回の旅では何を食べても美味しく、どの土地でも御馳走づくめ、豪華なメニューを楽しんだ。

【7日目】8月29日（水）北京へ日本大使館、文化和旅游部庁表敬訪問 晴れ

朝食前に6人が集まり、解放橋（大原橋）を渡って、河沿いの細長い公園の路を北へ上流へと歩き始めた。

釣り人や体操をする人、煙草をくゆらせる人、年配の男が何故か多い。中でも、

公園の河岸の向こうに、北方学院附属第一医院（旧察南病院跡地）ビルが見える。2人ばかり物珍しいのか、



張家口、清河。後方白いビルは北方学院附属第一医院、旧察南病院跡に建つ。

私達の後からついてくる。立ち止まったりやり過ぎると、数歩先でこちらを見ている。興味半分、または監視のつもりか。

「厄介だなあ」と思いながら、目的達成のために説明が必要かと思っ、私は彼等に近付いて、「私達は子供の頃、ここに住んでいた日本人だけれど、観光で今回来て、友達のお父さんがここで亡くなったので供養しているのです」と話しかけ、持参の線香と日本酒パック、和菓子をお供え、同行の5人にも線香を手向けてもらった。ありのままの話に、私のひどい片言の中国語でも通じたのか、心なし、にこやかな表情で彼等は離れて行った。お供えのチョコレートを渡しかけたが受け取らずに。

今は満々と水を湛えた清河、上流と下流を堰き止め、水を湛えた清河と見えるが、昔は大雨の泥流時以外はチョロチョロ水の所々に流れがある河原で、ゴミ捨て場にもなり、遺体も捨てられてあったりした。邦人の間で清掃を望む声も多く、次第に整えられて人も歩ける河原に一部なった。

昭和15年夏に、ここで模範飛行が公開され、北白川宮臨席のもとに、邦人達・軍・官・会社等が招待された。観客の見守る飛行機があることか、宮の席近くに突っ込み、大事故が発生した。父は出

張先で腸チフスにかかり入院中で、代理出席の社員は片足を失う怪我をした。秋元さんの父は周辺の警護巡察中で飛行機の車輪の間に挟まれ奇蹟的に無傷であった。

周囲の願いも空しく宮は亡くなられた。清河の河原に宮を悼んで記念碑が造られた。

記念碑は敗戦時、張家口占領の八路軍に直ちに爆破されたが、8月15日以降引き揚げた邦人達の後に、残留となっていた日本人高官、私の大坂の友、和佐さんの父、和佐蔵之介と弟と中国人・蒙古人の要人がそこで処刑された。

北京に出張中の和佐兄弟は敗戦を知り、北京発の京包線はもはや不通で、5日間馬を乗り継いで、張家口へ戻り八路軍に逮捕された。22日までに邦人の大部分は張家口駅・宣化駅から引揚列車、客車から、屋根もない石炭用の貨物車まで引揚用に編成され、溜め置いた5百台の車両が大働きして、老若・病人・幼児のいる家族等の配慮・優先等も混乱のうちになされ、一人でも多く乗車できるように手荷物のみと制限し、北京・天津へと列車で運ばれ、邦人はほとんど市内には居なくなつた。和佐さん家族は行き違いになつてしまった。

昭和20年に入って、駐蒙軍。蒙疆政府・華北鉄道が大東亜戦況不利の現状に、張家口の先行きを考えて、邦人4万人の内地、日本へ総引揚の予想を立てて、張家口駅に輸送車両5百両を溜め込み備えてあった。それでも蒙疆地区の残留孤児は百人程となった。

敗戦後、張家口に行くと、6年前までは朝も明けきらぬうちに、張家口の街歩きに独り出て、かつての我が家のあった社宅団地への道をたどる。今回は残念ながら、体力温存を考えて思う存分の行動を控えた。

この時のために、和佐さんが、私が着ていたブラウスを気に入って、大阪で取り替えてもらってきた和佐さんのブラウスに着替えて、河岸に立った。

線香を消し、供物を河に流し、祈りを捧げ、先の大戦の犠牲になられた人々、張家口に関わった先人達を想った。私のこの地での行事の一つである。今日は5人もの方にも参加いただいた。

北京へ出発。京包線列車の旅と異なつて、高速バス旅は駅がなく馴染みがないし渋滞でノロノロ走る時も。皆さん旅も終わりに近づいてお昼寝の方々も。

北京市内でバスを降りると、高原から来た私達には空気が重く、快晴ながら蒸

し暑い。

日本大使館表敬訪問、王府井(ワンフーチン・北京の盛り場)近く各国大使館集の一角にある。表通りから幾重にも回らず、高い塀の中に大使館ビルがある。外観は良しとしても内装が貧弱。一国を代表する建物、日本らしい趣を、お金がかかっても伝わる室内装飾を望みたい。見た目も海外では大切。

中国文化和旅游部庁を挨拶に訪れると、全体に重厚さを感じる建物、室内の設え、家具、調度が、机や椅子が立派なのだ。一等書記官のおもてなし、「皆さんに中国の美味しいお茶を淹れました」等のサービス精神に富んだお話にも恐縮する。日本の外交下手には定評があるが。彼我の差に考えさせられる。

【最終日】8月30日(木) 北京出発 羽田空港予定時到着 快晴

8日間の旅程を皆さんとこなし、「ああ、日本に戻ってきた」と羽田空港。「張家口で育ち、老人となり、現在も生きている自分……」、私に還った。張家口の空気を存分に吸い込んで、感覚を大切に思いつつ、我が家の玄関に靴をぬいだ。

(写真提供 秋元勇一郎)